

真木 正博 先生のご逝去を悼む

日本産婦人科・新生児血液学会 理事長 安達 知子

日本産婦人科・新生児血液学会 初代理事長ならびに名誉会員の真木 正博先生が、令和元年（2019年）5月18日に享年94歳でご逝去されました。

先生は、昭和51年（1976年）3月に秋田大学医学部産婦人科教室の第2代教授（現名誉教授）に就任され、本学会の前身である日本産婦人科・新生児研究会（1976年から1990年まで）の創立に関わられました。昭和58年9月14日ならびに15日に秋田市で開催されました第8回同研究会では会長を務められ、平成3年（1991年）に同研究会が本学会に発展しました際に、初代理事長に就任され3年間務められました。

何より、本学会の優秀演題賞「真木賞」は、先生の名前を冠する学会賞です。先生からの本学会への寄付金により設立されたもので、産婦人科、新生児・小児科領域の血液学の進歩ならびに若手研究者のモチベーションを高め、本学会の発展に多大なご貢献を賜りました。

先生の数々の輝かしい業績のうち、1985年にご発表された「産科DICスコア」（真木正博，寺尾俊彦，池ノ上克，産科 DIC スコア，産婦治療 1985；50：119）は、30年余りを経過した現在でも、本学会員のみならずわが国の多くの産婦人科医が利用し、多くの妊産褥婦の生命を守るのに役立っております。

いつも厳しくそして優しいご姿勢で、かつ、心に響くやわらかいご口調で私たちに多くのことをお教えいただきましたこと、誠に有難く思っております。これからも本学会の活動と発展をどうぞ見守ってください。

心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。



在りし日の真木先生 学術集会にて

向かって左から2番目：真木正博先生、右から4番目：筆者、
右から3番目：故坂元正一先生、右端：木下洋先生

真木 正博 先生ありがとうございました

産業医科大学 名誉教授 白幡 聰

本学会に私が初めて参加させていただいたのは、まだ学会（研究会）名に新生児が入っていないなかった第6回産婦人科血液研究会（1981年）のことですが、それ以来、真木先生には目をかけていただき多くのご指導をいただきました。そして、1986年10月に真木正博会長のもと第28回臨床血液学会が開催された時、いかにも真木先生らしい「ヒトの生涯と凝血系」という会長シンポジウムを企画され、私は「新生児・乳児」を担当させていただきました。私にとって、真木先生は、医学の師であったことはもちろんですが、人生の師でもありました。それは、真木先生から戴いた先生のご著書、随想：八十路のなかば（2010年）、達老のために—おしゃれ・洒脱に生きるあかさたな（2011年）、続・生から死まで（2014年）、卒寿のころ—死ぬまで勉強—（2015年）、九十路のころ（2016年）、随想：白寿向け—よく生きる、長く生きる—（2018年）、随想：逆らわず、ありのまま（2019年）で自分の生き方について多くのことを教えていただいたからです。「達老のために」のまえがきの中で、「年をとってしまったら、気張らずにゆとりがあり、自然体でありながら、さまになっているのが良い。ほんわかとした人間味のある雰囲気醸し出せる人、おしゃれとでもいうのだろうか、枯れていても、そこはかたく色気がみえる人、年を重ねたその分だけの余韻を醸し出せるような人がよい」と書いておられますが、真木先生そのもののお姿に映ります。

今年の3月にいただいた「逆らわず、ありのまま」のあとがきには、「本書をもって、75歳の時から始めた「生から死まで」の関連本の出版を終了することに決めた。〈中略〉難聴が進み、公務は辞したいと思っていたが、なかなか後任が見つからず今日になってしまった。ようやく後任が決まり、理事長の任期切れの6月をもって辞任し、7月からは生まれ故郷の先祖代々の墓がある山形に帰る予定にしている」と書いておられます。山形にお帰りになられるならその前に秋田大学でご講演をと依頼された、ご講演の当日にお亡くなりになられたと伺いました。本書を拝読し、「地球の誕生から終末へ」から「日本の将来」までその内容にあらためて感服し、お礼状を差し上げたばかりでしたので本当にびっくりしましたが、「ぴんぴんころり」の人生を望んでおられた真木先生が最後までご自身の生き方を全うされたのかもしれない。

だれそれに 会えると春の 黄泉の道

真木正博先生 安らかに眠りください。

合掌

真木 正博 先生を偲んで

宮崎大学長 池ノ上 克

故真木正博先生の突然のご逝去の報を受けた時は、ただ茫然とするばかりでした。ご高齢とはいえ理路整然とお話をされ、お酒も召し上がっておられたので、にわかには信じられませんでした。亡くなられた日も講演の予定であったとお聞きし、最後まで真木先生らしい人生を全うされ、抱き続けてきた尊敬の念がいっそう深くなりました。

前任地の鹿児島市立病院時代に遭遇した産科DICの患者さんの件で、一面識もないのに夜遅く秋田大学産婦人科の医局に電話をしてからのご縁でした。医局の先生と奥様とで真木先生の捜索を直ちに開始され、程なくご自身から電話をいただきました。患者さんの経過と検査データを報告すると、極めて適切な指示をいただき、私達は母体死亡を防ぐことができました。当時は固定電話しか普及しておらず、探す方も探される方も大変な時代でしたので、プロ中のプロに直接触れた思いでした。

この事がきっかけで産科DIC関連の研究仲間へと誘っていただきました。秋田大学、浜松医科大学、鹿児島市立病院の産婦人科で毎年持ち回りの研究会が持たれるようになり、第1回が昭和58年5月26、27日に秋田大学で開催されました。折しも26日に起きた日本海中部地震（秋田沖地震）と重なり、秋田市内や大学の建物がかなり傷んでいる中での開催でした。この研究会は今でも続けられており参加施設の数も増え令和元年で37回目を数えています。この研究会で真木先生がいつも言っておられたのは、「今日の発表では完成度が高くでなくても結構、ディスカッションを聞いて来年のこの研究会までに論文にして発表してもらえればいいんじゃないの～」でした。この研究会から日本産婦人科学会学術集会のシンポジストが育ち、大学の教授職や主要施設の部長職を務める人など多くのリーダーを輩出しています。

産婦人科・新生児血液学会にもこのような経緯から入らせてもらいました。出会いが広がり、小児科領域の先生方の研究成果に触れる機会が増えました。学会を通じて研究者としてまた教育者として多くのことを学びました。

学会活動に係る真木先生との思い出は、テルアビブで開かれた国際血栓止血学会での代役を急遽命ぜられ、お手伝いをしていた研究テーマの発表をしたことです。名古屋大学の斎藤英彦先生、浜松医科大学の寺尾俊彦先生の両大先輩に同行させていただくことになり、数日間にわたる海外旅行を経験させていただく貴重な経験となりました。真木先生からの素晴らしい贈り物であったと大切にしている思い出の一つです。

真木先生にいただいた学問的、人間的恩恵の深さは計り知れません。先生の安らかなご冥福をお祈りしながら、感謝と御礼の気持ちを込めてお別れの言葉にさせていただきます。真木先生ありがとうございました。

恩師 真木 正博 先生を偲んで

秋田赤十字病院 第一婦人科部長 佐藤 宏和

真木正博先生は2019年5月18日秋田大学産婦人科学教室同門会の日にお亡くなりになりました。その日は先生からご講演をいただく予定でしたが、マンションの玄関先でネクタイ、ブレザー姿のまま息を引き取られていたとのことでした。心からご冥福をお祈り申し上げます。

日頃から先生は、ピンピンコロリが一番とっておられました。これは、健康寿命を全うしなさいという先生の教えと心得ております。以前は学会にご一緒することも多く、出張時にはトレーニングシューズを持参され、早朝にウォーキングや散歩を楽しまれていました。健康に気づかい、その言葉を実践したのが、正に真木先生だと思います。

我々の医局は真木先生の時代から、医局旅行、なべっこ遠足、スキー旅行など行事が多く、結束の強い医局でした。いつも先生の周りには自然に人が集まり、「桃李もの言わざれども下自ら蹊を成す」の言葉通りでした。また、退官後も海外の友人とメールのやり取りをしているんだとおっしゃっていました。

私が真木先生の門をたたいたのは1985年です。1年後に大学院に入り、しばらくして研究生活が始まりました。研究室にはすでに村田誠先生や設楽芳宏先生など素晴らしい先生方がいらっしゃいました。何も考えることなく、血液凝固の研究に入りました。真木先生は本当によく研究の話をしていました。研究に困って相談すると、いつまでも話は止まりません。「組織因子の塊と言ってもいい胎盤に血栓ができないのはなぜか?」「抗凝固物質、血小板凝集抑制物質が存在するに違いない」。このコンセプトのもとに、Calphobindin-I (annexin V) が胎盤から精製されました。2匹目、3匹目のドジョウを狙い、胎盤から抽出したカルシウム依存性タンパクを二次元電気泳動でうまく展開できた時には、自分のことのように喜んでくれました。この一群のタンパクは当時色々な名前と呼ばれていましたが、海外からannexinに統一しようという提案が来た時には大変悔しそうにしておられました。

1990年大学院を卒業して間もなく、真木先生に呼ばれました。「ヨーロッパ生化学学会 (FEBS) でannexinの分科会がある、旅費を出すから参加してきなさい。」とのことでした。スコットランドのアバディーン大学の寄宿舎に泊まり、世界中からきたannexinの専門家と交わることができたことは私の一生を方向付けました。また、翌年にアムステルダムで行われた国際血栓止血学会の発表も後押ししてくれました。当時から世界的な視野を持っていた真木先生に心から感謝いたします。また、日本産婦人科・新生児血液学会では評議員に推薦いただき、幹事として学会に関わり、多くの先生方と知り合うことができました。1992年、真木先生の退官とともに研究生活に区切りをつけ、大学を離れましたが、研究の虫が騒ぎ、3年後には大学に戻りました。その後は、2年半の留学も含め、ずっとannexinの研究を続けることになりました。最初にいただいた研究マインドは一般病院婦人科勤務の現在も生き続け、トルソー症候群をはじめとする血栓症疾患などでも生かされています。恩師 真木正博、本当に長い間ありがとうございました。安らかにやすみください。